

カナダ日本語教育振興会 2004 年度年次大会

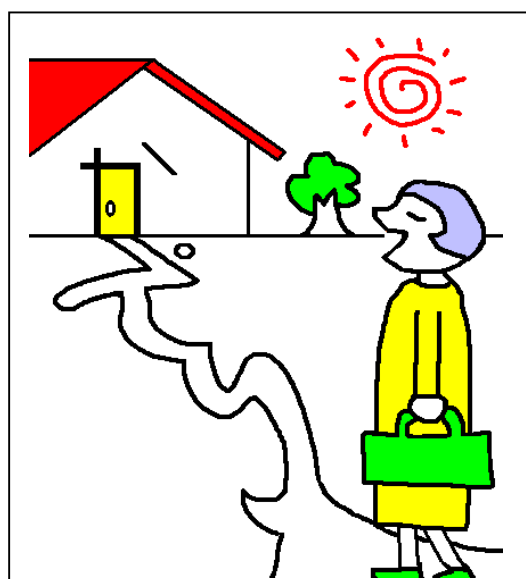
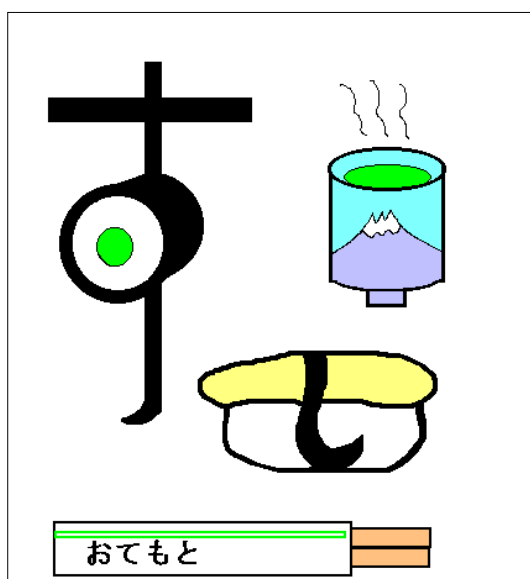
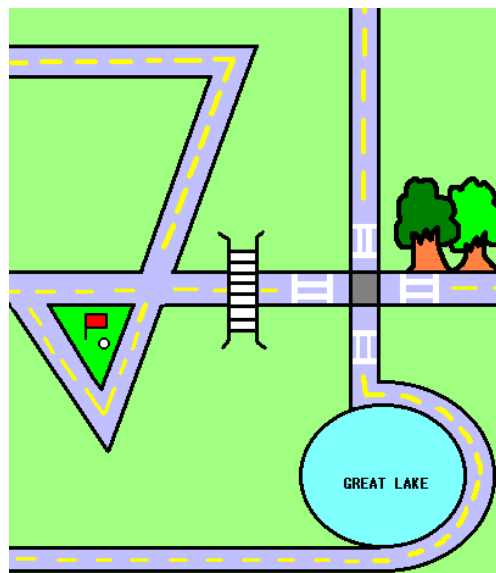
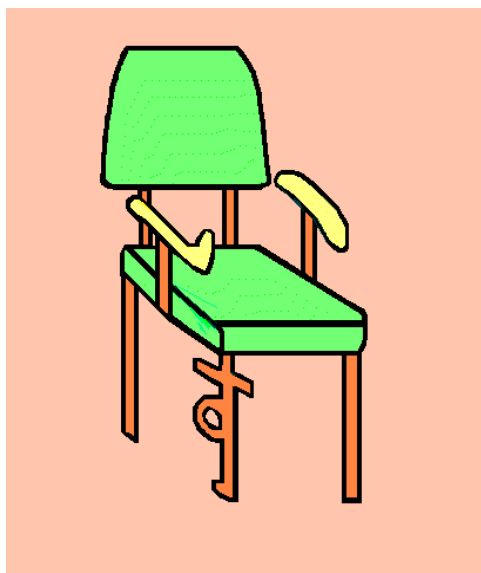
実践報告：〈にほんごアート〉を用いた楽しい絵教材の作成法と語彙導入の新手法

発表者：内田クツロフ雪絵 Yukie Uchida-Koutsaroff

本発表では、〈にほんごアート〉を用いた初等中等教育現場における「学習者とともに作る教材」について事例報告するとともに、現在開催中の〈にほんごアートコンテスト2004〉の経過報告を行う。

1. 〈にほんごアート〉とは何か

〈にほんごアート〉とは、ひらがな単語や漢字、擬態語擬声語を構成する文字を絵の中に組みこみながら、かつ、その意味を絵で表現する手法のことであり、筆者の造語である。漢字やひらがな一字一字を絵で表現する手法は従来から見られるが、複数文字で構成される言葉を絵で表現する〈にほんごアート〉は、筆者の考案した画期的なアイデアと言える。





なお、本アイデアの骨組は、筆者が昨年参加した国際交流基金主催の在外邦人日本語教師研修の課題研究〈絵で表現する日本語〉から生まれたものである。北浦和の一月にわたる研修期間内において25点の手描きのサンプル原画を作成し、研修最終日に発表を行った。

帰国後、すべての作品をデジタル画像に書き換えて、日本語国際センターが運営する日本語教師支援サイト〈みんなの教材サイト<http://momiji.jpf.go.jp/kyozai/>〉内の〈みんなのアイデア〉コーナーに全20回にわたり継続投稿、掲載を重ねた。(現在でも閲覧可能)

さらに、コンテストの立ち上げ(詳しくは後述)に伴って、自作HP〈にほんごアート〉を作成し、全80の参考作品(<http://www.nihongoart.com/NA003.htm>)を1つにまとめたほか、コンテストの応募要項等を掲載中である。

2. にほんごアートの特徴

年少者教育は学習の動機付けが薄い子供、学習能力が未発達な子供も含めてクラスが構成され、文字や語彙の定着がうまく図れないケースがまま見られる。そうした中、「楽しさ」を全面に打ち出した〈にほんごアート〉は、語彙導入の新しいアプローチである。

〈にほんごアート〉は教師一人が作るものではなく、学習者が主体となってアイデアを提供し作品を作り上げていくので、教師のアーティスティックな技量とは無関係に導入が可能である。筆者のクラスで導入したところ、学習者は作成の過程で日本語(とくに文字や語彙)への興味を深め、また、他の学習者の作品に大きな関心をよせた。そして連想記憶も手伝って、スムーズな語彙の定着(もしくは愛着)が実現した。

3. にほんごアートのクラス活用例(応用例)

〈にほんごアート〉のクラス活用例として、楽しいクラスアクティビティを紹介する。学習者が、教材のアイデア提供者、作成者、利用者として機能していることに注視されたい。

題 材: にほんごアート(へび)

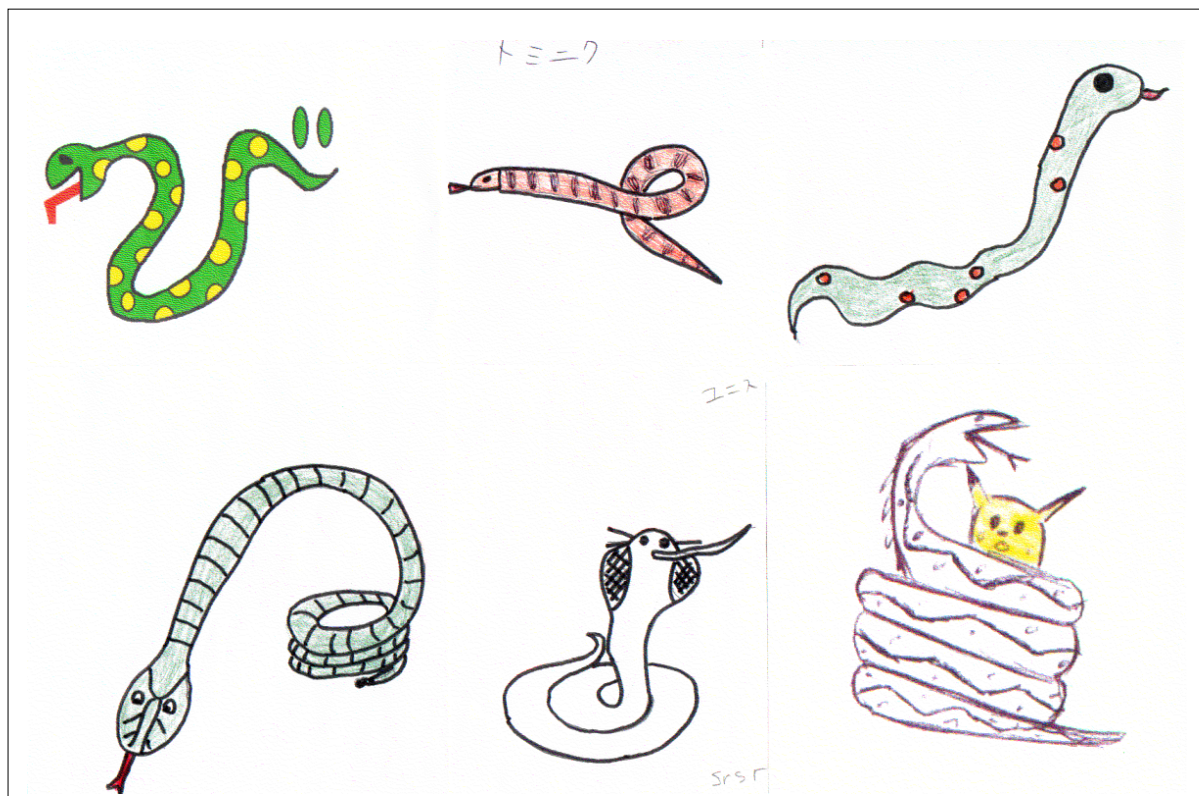
導入構文: 比較文(AはBより大きいですか等)

ねらい：みんなが知っているものでも、実は違ったイメージを描くことに着目する。また、目の錯覚を利用して、各自が違った判断をすることを応用する。

導入法：①各生徒に紙片を渡し、へびを描くよう指示。(一分程度の時間配分。下手でよいと強調)

②にほんごアートの<へび>の見せて、スネーク＝へびであることを定着させる。

③生徒の描いた絵を使って、文法導入を実践する。



効果：教科書などに用意された挿絵を使うより、学習者が自分で作成した図柄を使ったほうが親しみがわき、笑いが生まれる。また、答えがひとつに限定されないことで単なるロールプレイを超えて意見が分かれ、授業に活気が起こる。

また、絵を描くのをぐずる生徒も若干いたが、他人の作品を鑑賞・利用するのを嫌がる子は皆無であった。

他の応用例紹介：<http://www.nihongoart.com/KZ004.htm>

4. <にほんごアートコンテスト2004>開催にあたって

筆者が実行委員長を務める<にほんごアートコンテスト2004>は、カナダのオンタリオ州で日本語を学ぶ児童生徒を対象とした企画で、国際交流基金トロント日本文化センターとの共催事業である。本年度が初年度の開催であり、今後も継続して行う予定である。

①開催意図

初等中等教育では、子供の将来性を十分考慮し、動機付けの薄い生徒や学力がまだ未発達な生徒もクラスの一員としてノビノビと参加できる場を提供することは、教師の責務であろう。そこで、

本コンテストの参加を＜仲間との共生＞として位置付け、友だちと机を並べる意味をもう一度捉えなおしながら、日本語の得意な子も苦手な子も楽しく参加し、全員が平等にフィードバックを得られるような手法の構築を試みる。

本コンテストは、一部の選抜された学習者の日本語能力の優劣を競うものではない。学習者一人一人を将来性や可能性に期待しつつ、学習者の日本語運用能力やレベルによらず誰でも気軽に楽しく参加できる形態をめざし、かつ、その発表の成果を（コンテストに参加しなかった人も含めて）全体共有できる財産ととらえることを基調として、企画運用を開始した。

他の生徒の活動に興味を持って注目する姿勢を築くことが、日本語教育に限らず年少学習者で構成するクラス運営のひとつの目標であることも念頭におく。

②コンテストターゲット

コンテスト実行員会を本年2月末日に立ち上げ、国際交流基金と共催契約を締結したのち、広報活動を展開した。参加資格は、オンタリオ州の教育機関で日本語を学ぶ、Grade 1（小学校1年生に相当）からGrade 12（高校三年生に相当）の児童生徒を対象とした。

現在、オンタリオ州では、幼稚園児から大人にいたるまで、6500名以上の日本語学習者が確認されており、そのうち、第二言語教育や継承語教育として日本語を勉強する初中等（小学校、中学校、高校に相当）の学習者は1500名程存在している（国際交流基金2003年度調査）。

③期待される効果

開催にあたり、以下4点を期待効果とした。

（1）初等・中等教育における日本語教育の活性化

従来、オンタリオ州では初等・中等教育機関で学ぶ学習者を対象としたイベントはなかった。本コンテストをきっかけとして、地域に根ざし、かつ世界に広がる日本語教育の活性化が期待される。

（2）学校を超えた教師間のネットワークの樹立

コンテスト企画運営と参加を通じて教師間のパイプを太くすることで、情報交換の機会の増進増強が期待される。現在、コンテスト情報を中心に＜にほんごアート通信＞というニューズレターを定期発行している。（バックナンバー <http://www.nihongoart.com/NA005.htm>）

（3）作品の共有化・蓄積化によって、日本語教育の現場で即活用できる素材の提供

作品は教室内で教材として使用できるほか、ジャパNDERやヘリテージデーなど校内イベントツールとして活用が期待される。

（4）カナダの風土・文化に合った日本語教育の追及

広大なカナダの地形を考慮するとき、郵送で参加できるメリットは大きい。また、巡回展覧会出展作品群を各学校へ貸し出すシステム）を行うことでトロント一極集中をなくし、遠隔地の参加校への確実なフィードバックが期待される。

5. <にほんごアートコンテスト2004>経過報告

①参加数と内訳

すでに6月末日で作品の応募受付は終了し、全体で103名の参加、135作品が集まった。学校により幼稚園生と小学生の混合クラスがあることを考慮して、幼稚園生もパイロット参加として出品を受け付けた。(135点のうち、規定外作品も含め7点が審査対象外となった。)

今回は、ひらがな(単語)部門と漢字部門の2つの部門を設定した。各カテゴリーの出品数の内訳は、以下の通りである。

ひらがな部門への参加割合は31%、漢字部門は69%であった。

	ひらがな部門	漢字部門
G1-3 小学1-3年に相当	カテゴリーA 4作品	カテゴリーD 26作品
G4-8 小学4-中学2年に相当	カテゴリーB 17作品	カテゴリーE 38作品
G9-12 中学3-高校3年に相当	カテゴリーC 18作品	カテゴリーF 24作品

②審査・表彰の流れ

現在、漢字教具の開発で知られるヴィジュアルデザイナーで東北芸術工科大学教授の馬場雄二先生に審査委員長をお願いし、他三名の審査員の方とともに審査中である。

審査結果は、10月上旬にトロント日本文化センターで開催される表彰式で発表する予定である。当日は表彰式のほか、レセプションと馬場雄二氏の教具を実際に触って体験できる<漢字遊び展>開催を予定している。コンテスト関係者に関わらず、多くの参加者を見込みたい。

全体から大賞ほか、各カテゴリーから優秀作品を表彰する予定であるが、参加者全員をアイデア提供者としてねぎらう意図で、全員に参加賞を配布する予定である。

大賞作品は来年度の広報ポスターの図柄として使用され、他の優秀作品とともにトロント日本文化センター併設の図書館で展示を予定している。

③今後の活動

すでに、9月の新学期に向けて<にほんごアートコンテスト2005>の準備を進めている。2004の広報活動は今年3月から開始したため、スケジュールの調整やカリキュラムと時間的に適合せず、参加を見送った学校も多かったように思う。

今後も広範な広報活動を展開し、来期コンテストにもたくさんの参加を得ることで、各日本語教室が笑いに包まれることを切に願うものである。

氏名：内田クツロフ雪絵 Yukie Uchida-Koutsaroff

所属：ヒルフィールド・ストラタランカレッジ (Hillfield-Strathallan College)

資料：<http://www.nihongoart.com/>

以上